

## 劇あそびの取り組みについて考える

### —教員免許状更新講習「表現あそびを楽しもう」の実践報告より—

田中 麻紀子 山中 愛美

TANAKA Makiko YAMANAKA Aimi

本稿は2018年8月に本学でおこなわれた教員免許状更新講習「表現あそびを楽しもう」の実践報告である。現場で毎日子どもと過ごす教員たちは、表現あそびや劇あそびをどのように保育に取り入れているのか、どういったところを難しいと感じているのかなどを情報交換しながら講習をすすめた。講習内で出てきた意見・考えをもとに、今後の保育につながるよう考察する。

キーワード：教員免許状更新講習、表現あそび、劇あそび、

#### 1. はじめに

本学の教員免許状更新講習は、平成21年からおこなっている。今回初めて教員免許状更新講習を担当することになり、内容をどのようなものにするか検討したときにほとんどの園でおこなわれている行事の一つである「劇あそび」について考えてみることにした。

「劇あそび」につながる「表現あそび」は日常の保育内で行われていることであろうが、苦手意識を持った保育者も多いのではないだろうか。筆者の一人も保育経験の浅い時期は、自分が表現することを恥ずかしいと感じ、苦手意識を持っていた。そのため、子どもと表現あそびを楽しむ、劇あそびに楽しんで取り組むということができなかった。自分自身が「恥ずかしい」と思っていることを子どもと一緒に楽しめるはずがない。結果、劇あそびはこちらが動きを指示するようなやり方しかできなかった。しかしある研修会に参加したことで、表現に対する意識が一変した。それは、ゲームあそび感覚で、表現することを意識しなくても、自然に表現できているといったものであった。講師が忍者の師匠となり、参加者が忍者の弟子となって動く。「忍者にならなくては」と思うことなく、師匠（講師）の言葉に従って動くうちに自然に忍者の弟子になりきっていた。それ以来、人前で表現したり、何かになりきったりすることを恥ずかしいと思わなくなり、子ども

も表現あそびを楽しめるようになった。

「劇あそび」への取り組みについても、園によって、また保育者個人によって様々である。

このことを踏まえ、10年以上保育に携わってきた保育者が「表現あそび」や「劇あそび」についてどのような思いや考えを持って取り組んできたかを情報交換することで、明日への保育につながると考えたからである。

#### 2. 方法

調査期間 平成30年8月4日・5日

調査対象 夙川学院短期大学教員免許状更新講習

受講者 73名

(内、研究に協力すると回答した者 49名)

調査内容 講習内で以下の課題を出す。(この資料を基にグループディスカッションをおこなう)

1. 劇あそびのプロセスについて

①お話はどのように決めますか。

②導入はどのような方法をとりますか。

③台本づくりはどのようにおこないますか。

④衣装や道具類はどの程度作製しますか。また子どもはどの程度製作に参加しますか。

⑤劇あそびをおこなう際に、工夫しているところはど

んなところですか。

## 2. 劇あそびについて

①あなたは劇あそびや表現あそびは好きですか、嫌いですか。それぞれ理由と共に教えてください。

②これまでにおこなった劇あそびの中で、一番良い印象に残っているものについて、理由と共に記述してください。

③これまでにおこなった劇あそびの中で、最も良くない印象に残っているものについて、理由と共に記述してください。

④今後、劇遊びについてどのようなことを勉強していきたいと思いませんか。理由と共に記述してください。

・エピソードの使用、記載については「研究に協力する」とチェックしていた49名を対象とする。

・エピソードの全てを引用していない。

### \*倫理的配慮

研究への協力は自由であること、協力しなくても不利益にはならないこと、エピソードを使用する際の園名・個人名は匿名にすること、を書面・口頭で伝えた。

## 3. 事前アンケート

受講するにあたって、受講者には事前にアンケートに答えてもらった。その中でこの講座を選んだ理由として「自身の興味・関心から」と回答した者が21名、「講座内容が、今後の職務に役立つと考えたから」と回答した者が29名いた。(複数回答あり。また参加者全員がアンケートに答えているわけではない) また、「自身が苦手意識を持っている分野なので学びたいと思った」と回答している者もいた。

次に取りあげてほしい事柄として以下の回答があった。

- ・リズムあそびとリトミックの違いを知りたい。
- ・身振り表現、ごっこあそび、劇あそびなど具体的なあそび方やあそびの展開の仕方。
- ・年齢にあった題材の選び方。
- ・配役の際の注意点。
- ・保育にすぐ活かせる表現あそび、表現あそびから展開できる活動。
- ・子どもの表現を引き出す方法、声かけ。
- ・他の保育者が具体的にどのような導入、展開をしているのかを知りたい。

- ・0, 1, 2歳児の子どもと楽しめるあそび。
- ・劇あそびの無理のない取り組み方。
- ・ピアノを弾かなくてもできる表現あそび。
- ・「気持ちを伝える」ことにつながるようなもの。
- ・実際に動きながら、子どもの気持ちになり参加したい。
- ・劇あそびに使える効果音。
- ・実践している様子を見せてほしい。
- ・“やりたくない”という子に対して、どのように促すべきか。
- ・支援が必要な子どもも楽しく参加できるあそびについて。

主な回答は以上の通りであるが、一口に「劇あそび」といっても保育者の悩みは様々であることがよくわかった。

## 4. 講座概要

実際におこなった講座の内容とタイムスケジュールは以下の通りである。

【午前の部】	
9:20~9:30	オリエンテーション
9:30~9:40	手あそび、リズムあそび
9:40~10:20	講義
10:20~10:30	休憩(着替え)
10:30~10:40	グループ分け(8人×5グループ)
10:40~10:45	移動 リズム室へ
10:45~12:00	5分間の劇あそび脚本づくり・練習 【テーマ:夏】→効果音・自作の歌を用いること

12:00~12:50 昼食

【午後の部】	
12:50~13:50	劇あそび 発表
13:50~14:00	休憩(移動・着替え)
14:00~14:20	劇あそびについて(記述)
14:20~15:10	グループディスカッション (模造紙・ペン)
15:10~15:20	休憩
15:20~16:20	グループ発表
16:20~17:00	試験・アンケート

## 5. 結果と考察

講座内で記述してもらった課題に基づき、劇あそびの進め方や課題について考えていく。

### 1. 劇あそびのプロセスについて

#### ①お話はどのようにして決めますか。

- ・読み聞かせをおこなった際に反応の良かったもの。
- ・子どもたちが良く手に取る絵本。
- ・子どもが興味をもっているものを題材にする。

絵本を基に劇作りをしている保育者が多い。また、

- ・クラスのカラーにあったもの。

というように、当然のことであるが子どもの様子を見ながら決めていくということをしている。しかし中には、

・年長児のクラス担任。園の中で年長クラスがお話あそびをする題材がいくつか挙げられています。基本的にはその中から、その時のクラスの雰囲気であったり、子どもたちの興味関心のあるもの等をベースに、園長・主任先生と相談しながら決定する。

といった答えもあった。保育者の経験年数が少ない場合、自分で考え決めていくことに負担を感じる保育者もいるかもしれない。しかし何年も保育をしていく中で、“自分で考えたい”という思いは出てこないのか。また、万が一子どもが興味を示す題材が含まれていなかったらどうするのか。

小池(1990)は著書『劇あそびの基本』の中の「劇あそびになるお話」で〈子どもたちにあったよい素材(お話)を見つけることが、劇あそびを成功させる第一の条件です。お話なら、どんな内容のものでもすべて劇あそびになるかといえばそうではありません。劇あそびにふさわしいお話、子どもたちが全ての能力をそこに投げ込んで、おもいきって活動できるお話というのは、たくさんあるようで、案外見つけにくいものです。〉としている。

お話を選ぶ際に大切にしたいのは、まず自分が好きなお話であるかどうか、ではないだろうか。そういうお話をいくつか選んでおき、子どもの反応を見ながら決めていくことが、保育者も子どもも楽しんで劇あそびを進めることができる第一歩であると考えられる。

#### ②導入にはどのような方法をとりますか。(絵本を使う

など)

- ・絵本・ペープサート・紙芝居・指人形・素話・DVD

以上のような回答がほとんどであったが、中には

- ・絵本を読み聞かせてからイメージを感じ取り、物語や話の内容に沿った遊びのコーナーなどを設ける。

といった回答もあった。自由に遊ぶ中で子どもたち自身がイメージを深めていける方法である。

#### ③台本づくりはどのようにおこないますか。(台本集を使う・自分で作成するなど)

- ・台本集を使う。
- ・台本集を見ながらもクラスの人数などに合わせて自分で作成する。全員セリフの数をそろえて平等にするようにもしている。
- ・子どもたちから聞きとったセリフをまとめ自分で作成する。
- ・絵本(何冊か)を基にして、話やセリフを加えていく。劇あそびを進めていく中で、子どもが言った台詞や動きも足していく。
- ・自分で作成しつつ、行き詰った時には台本集を参考にする。

多くの台本集が出版されているが、それをそのまま使うという回答はほとんど見られなかった。これは保育をある程度経験した保育者であるからこそなのかもしれない。そのまま使うには、長すぎたり短すぎたりということもあるし、子どもが覚えにくいところもある。回答を見ていると自分で作成しながらも、部分的に台本集を使うなど上手く参考になっているといえる。「セリフの数をそろえて平等にするようにもしている」という回答には、保育者の苦労が伺われる。発表会で保護者から不満がでないようにするためであると思われるが、こういったところも考えなくてはならないことが行事の中の劇あそびであるといえる。

#### ④衣装や道具類は、どの程度作製しますか。また子どもはどの程度製作に参加しますか。

- ・大道具・小道具は基本的に子どもと一緒に作製する。
- ・子どもが作成したお面のみ。
- ・子どもとの話し合いの中で「作ってみたい!」と声があがったものは一緒に作っていきます。自分が使う小道具は自分で、大道具、背景などみんなで作るものはみんなです。先生は提案をすることもありますが、相談された時、手伝ってほしい時に手を貸すようにする。
- ・衣装・小道具等華美にならず最低限で、と園のルー

ルがある。動物役ならお面（頭に付ける）としっぽく  
らい。子どもたちは5~8割製作に関わっている。見映  
え重視ではなく、子どもたちと一から作りあげるとい  
うことに重きをおいているので。

子どもと一緒に道具類を作製できるほうが、子ども  
も劇あそびに対して親しみを持つことができる。また  
自分たちで作ったものを使って遊ぶことで、遊びが広  
がっていきやすくなる。立派なものを作らなくても、  
自分で作ったものには愛着もわく。しかし時間的な制  
限があること、また、劇あそび以外にも進めなくては  
ならないことなどもあり全てを子どもと一緒に作っ  
ていくという難しさはある。

- ・身体表現が難しいところや道具があった方が子ども  
たちの表現が映えるところは使用する。衣装はほぼつ  
くらない。
- ・できるだけ少なく、子どもが管理できるものにしま  
す。

衣装や道具類をたくさんつくれば、劇あそびがより  
良いものになるかと言えばそうは言い切れない。劇あ  
そびによっては、一人が何役もする場合もある。その  
時に全ての役に衣装があり、子どもが役を替わる度に  
衣装を変えなければならないというのは、子どもにと  
ってかなりの負担である。また、舞台の大きさが限ら  
れたものであるのに、所狭しと大道具や小道具が置い  
てあると子どもの動きを制限してしまう。上の保育者  
の考え方は、子どもにとってスムーズに劇あそびを進  
めるために必要なことであるといえる。

- ・衣装は保育者が行う。
- ・園にある衣装で使えそうなものは使用する。なけれ  
ば大人が作成。
- ・衣装や道具類は職員で作し、来年以降もつかえるよ  
う保存したりする。

子どもの負担を少なくするために、保育者が衣装等  
の作成をしている園も多いであろう。一回きりで使い  
捨ててしまうには惜しいものもあるし、材料費もかか  
るので次に役立つのは節約にもなる。ただ、全く同  
じものをそのまま使うことはできないと考える。劇あ  
そびの題材が変わると大道具や小道具のイメージも変  
わるので、あるものに自分なりに加えたりはずしたり  
などの作業が必要になってくる。小道具は、違う題材  
の劇あそびでも同じような小道具を使う場合があるの  
で、有効利用を考えることで他のことに使える時間が

増える。

- ・衣装は保護者が用意する。（園で見本をみせる）

これは一見保育者が楽になるように思えるが、実は  
一番大変かもしれない。まず、全員が同じ衣装・同じ  
役であるなら問題も少ない。自分の子どもが着る衣装  
であるので、保護者は当たり前のように協力するかと  
いえば案外そうではない。保護者の中には裁縫が苦手  
な人、裁縫をすることに時間を割くことができない人、  
園のことは園がするべきだと考えている人などさまざ  
まである。

それではどうするか。裁縫が苦手な人がいる一方で、  
裁縫が好きな人もいる。そこでサークル的に、裁縫の  
好きな人に集まってもらい作ってもらうのが問題を少  
なくできるひとつであるかもしれない。しかし、上手  
い具合に裁縫の好きな人の人数が集まらない場合は、  
全員に公平に作ってもらうしかないと考える。

### ⑤劇あそびをおこなう際に、工夫していることはどん なところですか。

まず、取り組みにおける工夫としては

- ・異年齢児での取り組みなので、三歳児にもわかりや  
すいようにする。
- ・全員が全ての役を一通りできるように遊んでいく。  
どの役も好きになって、面白いと思いつながり組み  
めるように。
- ・壁面に登場人物をかざる。
- ・歌も自分たちでつくったものにする。
- ・スムーズに劇あそびをすることも大切ですが、私は  
「ここ！」という目玉になるポイントを作り、見てい  
る人が楽しめる、やっている子どもたちが楽しめる劇  
あそびになるよう工夫しています。
- ・人前で緊張してしまう子どもなどいますが、全て  
遊びで進む中なら抵抗なく取り組める子どもも多い  
ので、「演じる」よりも日々の遊びなどを取り入れるよ  
うにしています。
- ・動物であれば実際に動いているのを見に行ったり、  
映像で見たりと子どもの、見て、触れて、感じる表現  
を大切におこなっている。
- ・練習時間を決めておこない、長くなりすぎないように  
する。

子どもがどうすれば、お話の世界にスムーズに入っ  
ていくことができるか、イメージを膨らませることが  
できるかを考えることは重要なことである。そこで保

育者たちは、上のような工夫をしている。またあそびの段階で盛り上がっても、劇として作っていく際に、思うように進めることができずに悩む保育者も多い。

それではどうすればよいのか。子ども自身が楽しむことも大切だが、みている人を意識できるような働きかけをしていくことが必要になってくる。行事での劇あそびは、必ず保護者や他のクラスの子どもに“みせる”ものである。「劇あそびをしている自分たちが楽しければいい」という気持ちでは、みている人にとっては訳のわからないものになってしまうのではない。人に“みてもらう”にはどうすれば良いかを保育者も子どもも意識することが必要であると考え。

小池・平井(1991)は著書の座談会の中で、〈小池—やる子が、見られているという意識があったのかないのか。見られているという意識があった時、二通りあると思うんですね。一つは今言ったみたいに観客がプレッシャーとしてしか入ってこない、見られているということが重荷以外の何者でもない。そうすると表現力も何もかも全部そのプレッシャーにおしつぶされていく。もう一つは見られているということとはとても嬉しいことで、見せるということで子どもたちの力がうんと飛躍する。交流できるような客があるということとはとても大きなことですね。平井—観客のことをばっちり意識して、生き生きやりますね〉と話している。「みられる」「みてもらう」ということを上手く伝えていくことも一つである。

また、本番当日の工夫としては

- ・演じる子どもたちや見ている人たちがわかりやすいように、ナレーターの部分をも多く作って場面の説明をおこなうように工夫しています。また年齢に合わせて歌や振りが中心であったり、セリフを多くするなど考えています。
- ・舞台の使用の仕方。舞台上だけではなく、舞台の下を使ったり、立体的に見えるように工夫したりもします。
- ・出番でない時でも歌ったりと役目があるようにしています。“クラスみんなで頑張ってるすごいでしょう”をみてもらおうと子どもに話をして、自分が舞台に出ていなくても歌ったりして頑張ってくれています。
- ・年長であれば道具の出し入れも子どもたちでできるように工夫する。

「舞台を立体的に使う」と記述している保育者がい

るが、これは“みてもらう”劇あそびとしては非常に重要なことで、案外気づいていない保育者もいるのではない。子どもがいきいきと劇あそびに取り組んでも、最終的にどのように“みせる”かは、保育者にかかってくる。同じところから出入りし、セリフを話す時もずっと一直線に並んだままでは、子どもの動きや表情までなくなってしまうように見える。やはり観客にとっても楽しめるように、というのはこういう工夫でずいぶん違ってくる。

保護者に対する工夫として

- ・出番やセリフの数など、できるだけ均等に。
- ・子どもたち一人ひとりが目立つシーンをもてるようにする。

誰にこの劇あそびをみてもらうのかといえば、保護者である。園によって違いもあるが、保護者はビデオを撮りながらみることも多いだろう。そうすると、劇あそび全体をみるのではなく、自分の子ども中心でしかみない事になる。「うちの子、前半全く出てこなかった」「セリフがほとんどなかった」など、自分の子ども中心の感想にもつながる。保育者としては、そのような不満を生み出さないためにも、このような工夫をせざるをえない。

## 2. 劇あそびについて

①あなたは劇あそびや表現あそびは好きですか、嫌いですか。それぞれ理由と共に教えてください。

\*「好き」「楽しい」と回答した者…21名/49名  
理由

- ・題材選びや台本、道具作りなど保育者の負担があったり、考え悩むことばかりの時期にはなりますが、クラス最後の大きな行事、みんなで一つになるということは嬉しく、成長もとても感じられるので好きです。
- ・何もないところから作りあげていく楽しさ、完成時の達成感などから劇あそびは好きです。
- ・自分自身が演じることが好き、楽しいと感じるから。
- ・自分ではない何者かになる楽しさ、子どもの自由な発想などが見られるところがとても良いと思います。
- ・一生懸命頑張ったことを誰かに伝えようとする事、伝わったときのよろこびがあるから。

「自分自身が演じることが好き」というのは、好きである理由として大きいだろう。「好き」と答えた者の多くは、「達成感を感じられるところ」と答えている。劇あそびをつくっていく過程で大変なことが多かった

としても、発表会を迎え、子どもがいきいきと劇あそびを楽しんでいる姿を見ると「やってよかった」と感じることができる。ただそこで終わるのではなく、「ここをもう少しこうすればよかった」など、次へとつながることを考えることも大切である。また「子どもの自由な発想を見られるところが良い」と答えている保育者もいるが、保育者が考えていないようなことを子どもが考え、表現することも多い。

金子ら (2016) は、(劇遊びは、保育者が子どもたち一人ひとりの心の動きを捉え、発表作品へと導くために多様な技術が必要とされる。さらに、劇遊びの指導のプロセスには、保育者の一方的な教え込みにならないようにし、子どもたちの個々の表現を大切にすること、保育者の配慮や工夫が求められる。) としている。いかに子どもの表現を引き出し、それを劇あそびに生かしていくのかは、まさに保育者の子どもの対する細やかな援助や敏感な視点が重要と言える。

\* 「嫌い」「苦手」と回答した者…16名/49名  
理由

- ・劇あそびは苦手。日がせまってくると焦る。年末頃から頭はずっと劇のことでいっぱい。園長の思いと異なると大きく変更。子どもにも負担がかかるため。
- ・あそびだけで終われるならいいが、親に見せないといけない時は何度も練習し、時には無理矢理参加させないといけない時もあるから。
- ・ピアノが苦手。
- ・正解がないので、どこまでつき進めるかに悩むので。

まず、行事としての劇あそびという位置づけの中で、園の方針や保護者の目などを気にしなければならないことを苦にしている保育者がいることがわかる。園長や主任は、どこまで担任保育者に助言するか。客観的に見られる立場として、「これでは、見ているものがわからない」といった時には勿論助言しなければならない。しかし細かいことまで口出ししすぎると、誰のつくった劇あそびなのか分からなくなる。「～園長の重いと異なると大きく変更～」という回答でわかるように、担任保育者の進めていきたいことと園長の進めたい方向性が違うので保育者が悩みを抱えている。これでは子どもに対しても良くない影響を及ぼすのは目に見えている。

過去の経験やたくさんの事例に基づいての助言であると思うが、実際に劇あそびを進めていくのはクラスの担任であり、子どもたちである。園長や主任とい

った第三者的に見る者は、担任保育者の思いやクラスの子どもの思いを汲みつつ助言することが求められる。

- ・自分自身が恥ずかしいと感じてしまうので。
- ・自分で何かを表現することが苦手なので、子どもたちからも上手く引き出すことができず、いつも同じようなふりつけや舞台の使い方になってしまいます。
- ・劇あそびは導入の仕方や台本づくりに悩んでしまうことが多いため苦手です。表現あそびは好きですが、正解を探してしまうため、少し恥ずかしさもあり、幼児期に堂々と参加できなかった記憶があります。

何かになりきるといのは、無心になって、あるいは、楽しんでということが前提にある。「苦手だな」「嫌だな」と思いながらの劇あそびへの取り組みでは、子どもに思いを伝えることも楽しさを一緒に味わうことも難しい。

遠藤ら (2009) は、(また、子ども達の楽しんでいる姿に触発されて、保育者もまた劇づくりの活動が楽しかったと思えたことで、さらに子ども達が劇づくりを楽しむという双方向的な関係が重要ではないか。T先生に本番を見ての感想を聞いたとき「見るというより参加しているという気持ちでした」と述べており、「教える—教えられる」の関係ではなく、保育者が楽しいと感じながら「共に劇をつくる」関係であったことが、子ども達の表現を充分生み出し、子ども達の多様な意見を一つのものにしていくとする仲間意識や「自分たちで作る」思いを強くしただけでなく、保育者の発表会に対する意識さえも変化したからである。) と述べている。

劇あそびに限らずどんな保育でも「楽しむ」というのは基本ではないだろうか。それも、「自分が楽しむ」でなく「一緒に楽しむ」という保育者の姿勢で、子どもの活動に対する意欲も大きく変わってくると考える。「表現するのが恥ずかしい」と感じている保育者が、まずは自分で表現するというのはハードルも高い。子どもに表現を任せてみて、おもしろい表現や工夫のある表現を見つけてみてはどうだろう。子どもの表現を見ているうちに「頭で考えるより身体を動かす」ということに気づけるはずである。

次の項目に関しては、「一番良い印象に残っているもの」「一番悪い印象に残っているもの」の二つを合わせて見ていくと、劇あそびの「好き」「嫌い」に差はなかったため、「良い印象」「悪い印象」の大きく二つに分

けて考察する。

**②これまでにあった劇あそびの中で、一番良い印象に残っているものについてなぜそう思うのかの理由も書いてください。**

・「にじいろのいし」  
一年間を通して“にじ”をテーマに保育してきたため、発表会の劇あそびでも子どもたちと共にお話をつくり、大型絵本にしたり、みんなで（聴覚障がい児・多動の子ども）参加できるよう工夫できたから。

・「イルカ」  
年長2クラスで児童文学を前半、後半に分けてストーリーをつないで一つの物語を演じるという手法を初めておこなった。スライドを使ったり、子どもたちとナレーションを暗唱したりと新しい取り組みをたくさんおこなったことが心に残っている。インフルエンザで前日まで休園となり「仕上がるのか？」と不安に思ったが、子どもたちはイキイキ伸び伸びと演じており、「表現を楽しむ」大切さを改めて感じた作品。

・「カラスのパン屋さん」  
動物や生き物ではなく、“パン”という食べ物を身体で表現することがおもしろかったからです。粉をこねる、成形する一連を実際にパンを作ることで体験し、イメージできるようにしてみました。

・「泣いた赤鬼」  
保育士をして5年目、少しずつ園の方針や決まりごともわかり、今までの他のクラスを参考にして自分なりの劇あそび作りがわかった。ごっこあそびから子ども一人ひとりが積極的に参加しているのが伝わり、私も楽しかった。ごっこあそびを十分することで、子どもも伸び伸びと表現できていた。

・「11匹のねことあほうどり」  
子どもたちの好きなシリーズの絵本を選定したこと、ままごとあそびをそのままコロッケ屋に生かすことができたこと、最後にあほうどりが出てくる場面を小太鼓やシンバルを用いたことで盛り上げることができたこと。何より一年経ってからも、まだ子どもたちがこ

のお話を気に入って遊んでくれていること。

・「つるのおんがえし」  
年長で取り組みました。劇あそびを進める中で、子どもたちから「〇〇したい」などとアイデアが出てきて膨らませていきました。発表会前にインフルエンザが流行し、学級閉鎖になるなど欠席者が多く、友だちの役まで動きやセリフを覚え練習しており、自然と助け合う姿が多かった。役の心情についても深く話し合いができ、感情を込めすぎて涙を流したりアドリブを入れる子も出てきていました。一人ひとりが「やりたい」と思いながら取り組んでいたように思うものでした。

・「ライオンキング」  
三年間続けてクラスを持った子どもたちと、長い年月をかけて製作を中心に表現する面白さや楽しさを伝えたことで、自分たちで考え、作成し、演じるということまで表現してくれたから。

「良い印象に残っているもの」については、劇あそびが「好き」であっても「嫌い」「苦手」であっても子どもと一緒に工夫できたという理由が多い。それによって子どもも自分で表現を考え、友だちと協力し、積極的に参加することができる。そしてそのような子どもの姿を見た保育者は、子どもの表現をどのように劇あそびの中に盛り込んでいくのかを考える。子どもと保育者、互いに劇あそびの内容を充実させることにつながっていく。

**③これまでにあった劇あそびの中で、最も良くない印象に残っているものについてなぜそう思うのかの理由も書いてください。**

・「ともだちほしいな おおかみくん」  
販売されているシナリオ通りに進行した。（保育士2年目の時）曲数も多く、セリフもおどりも多い為、子どもたちが自発的に楽しむというよりは教え込みになっており、完成度は高かったが、練習ばかりで子どもも保育者も楽しめていなかった。

・「そんごくう」  
自分で選んだわけでもなく（園の方針）役も教員サイドから決め、もともとあるものに子どもを入れ込む形になっていたため。（自分自身も未熟だった）

・「ピーターパン」

やりたいことは沢山あったが、横から「こうするべき」という意見の押し付けが多く、子どもと作り上げることができなかつたように思う。2年目の頃だったが、見栄えや役の男女といった決めつけなど他の先生の意見で、子どもと作る過程で話し合ったことをひっくり返されたり…ということが納得できなかつた。完成度よりも楽しんで表現するというのを大切にしたいと思った。

・「もりのおふろ」

2歳児の劇ごっこだったが、ストーリーがあまり上手にできず何度も変更してしまい、子どもを混乱させてしまった。

・「おおかみと七匹のこやぎ」

まだ2年目だった時、リーダーの先生が無理やりやっいて子どもを怒ったりして楽しくなかつた。

・「やさいのパーティーおおさわぎ」

大変なクラスで、担任も不在のなかの劇あそびだった。そのためオペレッタの台本そのままを子どもたちにおろし、衣装もすべて教師が作ったので思い入れのないまま無事発表会を終えることだけが願いとなつてしまった。

・「泣いたあかおに」

新人時代、初めて担任した5歳児クラスの劇でノウハウも表現あそびの取り組みも全くしてこなかつた中での劇あそびだったので、導入も進め方も全ておろそかだったこと。お話の中で伝えたいことが劇あそびをした後で認識が変わり、このままにして本当に良かったのか、今でも迷いがあるから（他人の犠牲の上に成り立つ幸福で、根本的な解決に至っていないストーリーだと思った）

・「シンデレラ」

十分にごっこ遊びができなかつた。題材決めが遅く全体的にとりかかりが遅れた。登場人物の役になりきれずどの場面も進み、見せ場がはっきり“ここ”というのが決まらず、さら〜と流れてしまったため。

・「ともだちほしいな おおかみくん」

3歳児で取り組みました。子どもたちが自発的に取り組めるようにと思い、子どもの意見が出るのを待ちすぎたり、アイデアをそのまま取り入れすぎたことで、導入の部分で上手くいかず、それが最後までひびいてしまった。動物の表現の仕方など、ある程度教師側も促していかなければならなかつたのに、自由にさせすぎたように思う。

・「あらいぐまとねずみたち」

2年目でお話で遊ぶこと、表現ということ自体がわかっておらず、どう進めたかもおぼえていないから。遊ぶというより練習だったように思います。

・「おすしのピクニック」

担任間が上手くいかず、取り組みが遅かつたうえに、“させている”感が前面に出た内容だった。

・「オズの魔法使い」

見栄えを気にしすぎた台本づくりになり、強制するような形になってしまった。

・創作のおはなし

未満児クラスは、いくつかの絵本の中から部分部分を引き出して担任がつくっていくことが多い。その中でやっぱり構成を大切にしておくと考えて工夫しないと、出来上がったときにストーリーが入ってこなかつたりしたことがある。

「良くない印象」としての理由の主なものには劇あそびを強引に引っぱっていくことにより、子どもに無理をさせてしまったというものがある。今回講座に参加した保育者たちの大半は、劇あそびを発表しなければならなかつた。発表するからには、日にちの制限、また園によっては園の方針など縛りがあることもある。また本番当日は、保護者の目もあるので「公平なセリフの数」などの縛りがまた増える。それらにより、保育者は劇あそびを窮屈に感じだんだんと迫ってくる本番にプレッシャーを感じ、子どもを強引に引っぱっていくことにつながってしまうと考える。

しかし劇あそびを発表している全ての保育者がそのように感じていないということは、保育者の側にも工夫する余地が必ずあり、子どもと楽しみながら劇あそびに取り組むことができるはずである。

松山(2010)は、〈劇つくりによる子どもの育ち、子どもの表現の特性について学び、理解するとはいえ、保育者も劇つくりを楽しむためには、保育者が「表現する過程を大切にしたい劇つくり」とは子どもにとってどのような活動なのかを具体的に理解しておく必要があるであろう。そのうえで、劇つくり以外の時間の活用や、劇つくりの活動をそのものの時間配分も含めて、子どもたちが楽しくなるような、また、落ち着いて表現できる計画を立てることが大切になる。〉と述べている。長期的にも短期的にも時間に余裕がないと、子どもを叱ったり強引になってしまったりにつながりがちになる。時間的余裕のある計画は、保育者の気持ちの余裕にもつながるので、そのあたりはすぐにできる工夫であると言える。

**④今後、劇あそびについてどのようなことを勉強していきたいと思えますか。理由と共に記述してください。**

- ・舞台の使い方や間の取りかたをまだ悩むことが多いので、上手く考えていけるようになりたい。
- ・台本を作る時のポイントやどこから始めていけばいいのを知りたい。
- ・ピアノの効果的な使い方。効果音。
- ・ピアノが苦手な私でも使える曲、アレンジ etc 教えていただけると嬉しいです。
- ・限られたステージのスペースでどのような動き、表現を子どもたちと一緒に作っていくか勉強したいです。
- ・配役の決め方→子どもがしたい役と先生がしてほしい役が違う時困る。
- ・身体で表現し、道具類は最低限のものにする方法。
- ・劇あそびのお話を決める際に何を大切に決めていけばいいのを学びたい。
- ・劇あそびとオペレッタの具体的な違い。

これらは、実際に劇あそびをおこなうにあたっての技術的なことである。舞台上での見せ方などちょっとした工夫で見ている側も楽しんでみることができる。

- ・消極的な子やイメージしにくい、入りたくない子がどのようにしたら参加できるのか、したくなるのか。皆がいきいきと参加できるようにするには、どのような援助や環境構成が必要なのかを勉強していきたい。
- ・支援が必要な子どもの参加の仕方など学びたいと思えます。

支援が必要な子どもの参加については、また別の機会に考えていきたいと思う。

- ・劇あそびの中にいろいろなものを取り入れて、生活全ての最終的なまとめとして発表することについて学びを深めたい。小道具や大道具作りも今までの製作の総決算であり、その出し入れも全て自分たちで行う。順序だて、自分で全体を認識して動く。演じるのは表現の中の1つであり、生活の一部。より生活がそのまま集大成となる劇あそびについての学びを深めたい。
- ・どのような導入が子どもたちにとって一番良いのか、スムーズに楽しく劇あそびに取り組んでいくことができるのか。子どもが主体となって取り組んでいけるようにするには、どんなことが大切なのか、もっと理解することで子どもたちの楽しい劇あそびにつながると思うからです。
- ・一人ひとりの表現を個人としても全体としても最大に発揮してあげられるかどうかは教育者にかかっていると思うので、見せ方を学びたいです。
- ・“発表会”のためだけでなく、日頃から表現あそびを楽しむための具体的な保育の仕方。→そこから日頃の表現あそびを劇あそびにつなげていくプロセス。

行事としての劇あそびは、一年の集大成として位置づけられていることが多い。一年間過ごしてきた友達や保育者と共に作りあげていく劇あそびは、これまで経験したことを生かしながらかえたり、気持ちの通じ合った仲間と意見を出し合ったりしながら作っていくような援助が必要である。

- ・第三者の立場から客観的に見られるようにならなければいけないので担任の思いをくみながら的確にアドバイスできるようなことを学べればと思います。

クラスの担任としてではなく、園長や主任といった立場でのことであろう。これまでの記述の中にもたびたび、自分の思いと園長や園の方針の違いでストーリーや題材自体を変えなければならなかったという記述があった。園としての方針があるのなら、題材や脚本を作る前にしっかりと話しておくべきである。子どもと劇あそびを始めてから、「方針と違う」というのは子どもが混乱してしまう。ましてや、園長や主任が劇あそびをするのではないので、クラスの担任の思いを無視したアドバイスや援助はするべきではない。

## 6. おわりに

これまで、劇あそびについてさまざまな園のやり方や保育者の考えを直に聞く機会を持つことができなかった。教員免許状更新講習という場で、たくさんの保育者の考え方や劇あそびへの取り組みを知ることができ、改めて劇あそびの奥深さを考えさせられた。

また、講習内では、グループに分かれて「夏」をテーマにした5分間の劇あそびの制作・発表に取り組んでもらった。自分たちで劇あそびをすることで、「劇あそびをする側の子どもの気持ちに気づくことができた」といった保育者もいた。

講習会の終盤に「本園では、CDから流れてくる歌やセリフに子どもが合わせて劇をしています」との話聞き、非常に驚いた。その話や今回の講座の保育者たちの経験を読んで、筆者らが各園の様々な劇あそびへの取り組みの方法の違いをまだまだ知らないことに気づかされた。今後も子どもと保育者が一緒に楽しみながら取り組むことができる劇あそびについて検討していく必要性を感じた。

## 7. 引用文献・参考文献

- 小池タミ子 (1990) 『劇あそびの基本』 晩成書房 p197  
小池タミ子・平井まどか (1991) 『劇あそびを遊ぶ 三歳から大人まで』 晩成書房 p13  
金子智栄子・櫻井ひとみ・金子智昭・金子功一 (2016) 「幼児の自由な表現を尊重した劇遊びの実践的研究—大ホールにおける発表会に向けての保育者の指導経過と子どもの変容—」 『文京学院大学人間学部研究紀要』 Vol.17 p50  
遠藤晶・江原千恵・松山由美子・内藤真希 (2009) 「幼児の「表現する過程」を大切にしたい劇つくりの実際」 『武庫川女子大学紀要』 57 p33  
松山由美子 (2010) 「若手保育者はどのように幼児の身体表現を引き出そうとしたのか—子どもの「表現する過程」を大切にしたい劇つくりの実践より—」 『四天王寺大学紀要』 第50号 p225

### ピアスーパーバイザーからのコメント

教員免許更新講習を通して、子どもの劇あそびについて検討することにより、受講生の方は、保育現場における子どもの表現活動について考えるよい機会になったと思います。同時に、この講習を行った

講師にとっても、子どもの表現活動について考える契機になりました。生活発表会が近づくと、子どもは劇の発表の練習をします。その時、多くの園において、保育者が声を張り上げながら指導している光景をよく見かけます。そのような指導では、子どもは、表現活動を楽しむことが出来ません。この考察にもあったように、子どもが、「劇あそび」として楽しむことが出来ているのか、常に考えることが保育者として、とても大切なことだと思います。このことが、より多くの保育現場の先生にご理解いただけることを願っております。(担当：園田 雪恵)